幼小中一貫カリキュラムにつながる幼稚園カリキュラムの研究

松岡　勝彦[*1]・大森　洋子[*2]・厚東佳奈枝[*2]・高田　和宜[*2]
福田　香織[*2]・髙橋　千恵[*2]・松村　淳子[*2]

A study of a kindergarten curriculum as fitting into an integrated curriculum from kindergarten through junior high school

MATSUOKA Katsuhiko [*1], OHMORI Yoko [*2], KOTOH Kanae [*2], TAKATA Kazuyoshi [*2],
FUKUDA Kaori [*2], TAKAHASHI Chie [*2], MATSUMURA Atsuko [*2]
（Received August 5, 2019）

キーワード：幼稚園教育、カリキュラム、幼小中一貫

はじめに

山口地区の附属学校園（附属幼稚園・附属山口小学校・附属山口中学校）では、2021 年度の幼小中一貫カリキュラムの実施に向けて、2017 年度より、幼小中合同での研究をスタートさせた。2017 年度は、月 1 回幼小中合同会議を開催し、何度も話し合った結果、幼小中の 12 年間を通してめざす人間像を「よりよい未来を共に創り出す人間」と設定することができた。また、そのめざす人間像の実現のための共通の視点として、「対象と向き合う姿」「他者と向き合う姿」「自己と向き合う姿」を掲げ、保育や授業、子どもの姿を共通の視点で読みとり育てていくという共通認識に立つことができた。

2018 年度は、これらの「育てたい３つの向き合う姿」を幼小中共通の観点として保育・授業検討を重ねることで、子どもの姿と事例を根拠とする幼小中一貫カリキュラムを作成しようとしているところであるが、これに伴い、幼稚園のカリキュラムも、幼小中共通の視点から見直す必要がある。共通の視点から子どもの発達を捉え、その時期にふさわしい環境構成や援助を再考して再編成していくことで、幼小中に一貫性のあるカリキュラムができ、12 年間の育ちを見通した一貫教育が可能となる。

また、幼稚園教育要領が改訂され、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえたカリキュラムの編成が求められているとともに「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を小学校と共有して連携を図り、幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続を図ることが求められている。幼稚園の現行カリキュラムを「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」も踏まえて見直していくことは、幼小の滑らかな接続のためにも重要なことである。

これらのことから、本研究では、「対象と向き合う姿」「自己と向き合う姿」「他者と向き合う姿」という幼小中共通の視点と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」とを踏まえて幼稚園カリキュラムの見直しと再編を行うこととした。

１．研究の目的と方法

１－１　研究の目的

本研究は、幼小中一貫教育実現のために共通の視点として見出した「対象と向き合う姿」「自己と向き合う姿」「他者と向き合う姿」の視点と、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」とを踏まえて、幼稚園カリキュラムを見直し、幼小中 12 年間の子どもの育ちが繋がる幼稚園カリキュラムを再編することを目的とする。

＊１　山口大学教育学部特別支援教育コース　＊２　山口大学教育学部附属幼稚園

１－２　研究の方法

研究の方法は次のとおりである。

①　３歳から５歳までの各年齢の事例について、「対象と向き合う姿」「自己と向き合う姿」「他者と向き合う姿」の３つの視点から考察し、検討する。

②　「対象と向き合う姿」「自己と向き合う姿」「他者と向き合う姿」の３つの視点から捉えた幼児の育ちの姿について３歳から５歳までの見通しをたてる。

③　現行の幼稚園カリキュラムについて、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の観点から捉え直す。

④　幼稚園教育の中から小学校以上の教科につながる内容を見出し、幼小中一貫カリキュラムの中に位置づける。

⑤幼小中一貫カリキュラムの幼児期の部分について、幼稚園教育を的確に表現しているか、つながりが見えるかという観点から再検討する。

⑥①～⑤を踏まえて、現行幼稚園のカリキュラムについて、期、ねらい、内容を見直し、再編成する。

なお、①～⑤までは順序を表すものではなく、同時進行で、実践と見直しを繰り返す中で行きつ戻りつしながら進めていく。

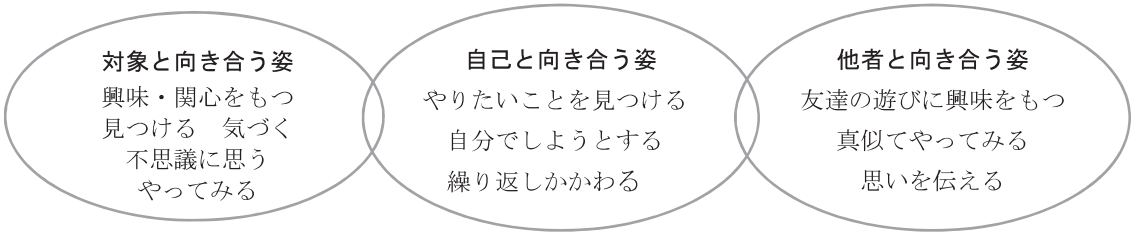
２．研究内容

２－１　３つの視点から事例検討する

３歳から５歳までの各年齢の事例について、「対象と向き合う子ども」「自己と向き合う子ども」「他者と向き合う子ども」の３つの視点から考察し検討した（**図１**）。

「シャボン玉くっついた」　４歳児　６月２８日（木）

事例に見られる３つの姿



アズミ・マリコ・シンタロウがシャボン玉の場で遊んでいる。個人用のシャボン液の入った容器とストローを持ち、強く吹いたりゆっくり吹いたりしていろいろな大きさのシャボン玉ができるのを楽しんでいる。手にシャボン液がついたアズミは、一度近くの水道に行って洗い流し、またシャボン玉の場で遊び始める。

アズミ・マリコがシャボン玉の場で遊んでいると、アズミの手の甲にシャボン玉がくっつく。アズミは手の甲にくっついたシャボン玉を見つめ、①自分の濡れた手のひらに吹き口を向ける。手のひらにシャボン玉ができるようにそーっと吹くとシャボン玉が手にくっつく。アズミは②保育者とユズキの所に来て、「見て見て。すごいでしょ。これはマジックです。」と見せる(写真Ａ)。ユズキは「わっ。すごい。アズミちゃんシャボン玉もってる。」と言う。保育者も「えー、みんな見てみて。ほんとだ。アズミちゃんシャボン玉もってる。すごいマジシャンみたい。」と言う。すると、室内で他の遊びをしていた子どももアズミの近くに集まる。③アズミが「でしょ。すごいでしょ。これねアズミちゃんが自分で見つけたんよ。」と保育者とユズキに話してシャボン玉の場に戻る。

（写真Ａ）

それを見て④ユズキははさみやペンを片付けてシャボン玉の場に行く。ユズキは、大きな⑤シャボン玉をつくって手に乗せようと何度　も繰り返しているが、そのうち輪（ワイヤーを輪にし毛糸を巻いたもの）をもってシャボン玉を追いかけたときに、偶然シャボン玉の輪にシャボン玉がくっつく。ユズキは⑥「わっ。見てみて。くっついた。」と言うとシンタロウが⑦「すごい。シンちゃんも。」と言う。保育者が「わーすごいね。シンちゃんもやってみたいの？」と聞くと、ユズキとシンタロウが顔を見合わせる。シンタロウが⑧ゆっくりユズキのシャボン玉に近づいてシャボン玉の輪をそっとシャボン玉にくっつける。すると大きなシャボン玉はどっちのシャボン玉の輪にもくっつく（写真Ｂ）。

（写真Ｂ）

シンタロウは、⑧「わー！先生見て。すごい？すごいでしょ。」と言い、⑨ユズキは「はい、マジック～！」と言う。保育者はそれを見て、「ほんと、すごいね。シンちゃんとユズくんのマジックだ。」と言う。すると⑩シンタロウが、「今度はシンちゃんからする。」と言って、また新しく大きなシャボン玉をつくり、ユズキがくっつける。

【考察】

対象と向き合う姿

○姿のとらえ

・アズミは、シャボン玉で遊びながら濡れた手にシャボン玉がくっつくことを不思議に思い、もう一度手のひらに向けて吹いてみてくっつくことを確かめている。（下線①）

・ユズキは、シャボン玉が手にくっつくことに興味をもち、自分も大きなシャボン玉をつくって捕まえようとする。偶然くっついたことをきっかけに、濡れたワイヤーにシャボン玉がくっつくことに気づいている。（下線⑤⑥）

・シンタロウは、シャボン玉が輪にくっつくことを知っていてユズキのシャボン玉に近づけてくっつけている。（下線⑧）

○環境構成や保育者のかかわり

・個人用のシャボン容器は、自分がしたいときにできたり、何度も繰り返しかかわったりできるように、大きいシャボン玉ができる場は人工芝を敷き、興味をもったときに上靴のまますぐに遊びに行けるように用意している。

・一人一人が思いをもってシャボン玉にかかわる姿を大切に受け止め、一緒に遊んだり共感したり見つけたことを喜んだりする。

他者と向き合う姿

○姿のとらえ

・アズミは、自分で見つけたこと（シャボン玉が手にくっつくこと）を保育者や友達に伝えたくて側まできて話しかけている。保育者や友達に共感してもらってうれしくなっている。（下線③）

・ユズキは、アズミのシャボン玉が手にくっつく様子を見て、自分もシャボン玉にかかわり、アズミと同じようにシャボン玉を手に乗せようとしている。また、アズミが「マジック」と言ったのを聞いて、自分もシャボン玉が輪にくっついたことを同じように「マジック」という言葉で表している。（下線⑤⑥⑨）

・シンタロウは、ユズキのやっていることを見て、自分も同じことがしたくなっている。保育者が間に入ることで、ユズキと一緒にシャボン玉がくっつくことを楽しんでいる。（下線⑦⑩）

○環境構成や保育者のかかわり

・子どもが見つけたことや発した言葉を同じ言葉を使って周りの子どもたちに伝えたり、一緒に共感したりして友達に関心がもてるようにかかわる。

・保育者が間に入って言葉を補ったり代弁したりすることで、一緒に遊んで楽しいと思えるようにする。

自己と向き合う姿

○姿のとらえ

・アズミもユズキもシンタロウも自分でやりたいことを見つけてしようとして、自分なりにかかわってシャボン玉がくっついた喜びを味わっている。（下線②④⑦⑧⑩）

・アズミは、シャボン玉が手にくっつくことを自分で見つけ、喜んでいる。（下線③）

・ユズキはアズミの楽しそうな様子を見て、自分の遊びを変えてシャボン玉をしようと選んでいる。そしてシャボン玉を手に乗せようと何度も繰り返しかかわっている。（下線⑤⑥⑧）

○環境構成や保育者のかかわり

・繰り返しかかわれる場を用意し、子どもたちの思いに寄り添って見守ったりすることで、シャボン玉の遊びを心ゆくまで楽しんだり、何度も試したりできるようにする。

・自分でやりたいことを見つけたり、自分でやってみようと試したり、何度も繰り返したりする姿を認める。

図１　４歳児　事例検討

事例検討により、①それぞれの時期にどのような３つの向き合う姿が見られるか、②そのような姿を育てるために有効な環境構成や援助は何か、について探ることができた。また、各年齢の育ちを追っていくことで、幼児期に育てたい（幼稚園から小学校につなげたい）「３つの向き合う姿」について、次のように共通認識をもつことができた（**図２**）。

対象と向き合う姿

遊びや生活の中で様々なことに出会い、親しむ経験を重ねる中で、興味・関心をもってかかわり、様々な気づきや発見の喜びをもつ。

いろいろなことに好奇心や探究心をもってかかわる体験を通して身近な事象にさらに興味関心を高め、考えたり試したり工夫したりする。

自己と向き合う姿

自ら意欲的に物事に取り組み、夢中になって遊んだり繰り返し挑戦したりし、自信や満足感をもつ。

いろいろなものにかかわったり、友達とかかわったりする中で思いをもって取り組んだり自分なりに考えたり気づいたりする。

他者と向き合う姿

友達と一緒に活動することを喜び、友達に自分の思いを伝えたり、友達の思いを受け入れたりして遊ぶ。

相談したり試行錯誤したりしながら友達の考えに触れ、新しい考えを生み出す楽しさや共通の目的が実現する喜びを味わう。

図２　幼児期に育てたい対象・自己・他者と向き合う姿

２－２　対象・他者・自己と向き合う姿について３歳から５歳までの育ちの姿を整理する

事例検討を重ねることで明らかにできたそれぞれの年齢の「３つの向き合う姿」について、その育ちの過程を下図のように整理した（**図３**）。その際、①本園の現行教育課程が「個の安定と自立」「人とのかかわり」「環境とのかかわり」の視点で構成されていることを活かし、教育課程や指導計画の中の姿や援助を参考にして「対象」「自己」「他者」と向き合う姿について考えた。また、②「他者と向き合う姿」については、平成 27、28 年度に研究した「友達とかかわる力を育む環境と援助の研究」を、③「対象と向き合う姿」については、平成 29 年度に研究した**「思考力の芽生えを育む保育について考える」も参考にした。**

３つの姿について３歳から５歳までの育ちの姿を明らかにすることで、教職員が育ちの姿を共有し共通理解することができ、見通しをもつことが可能となった。

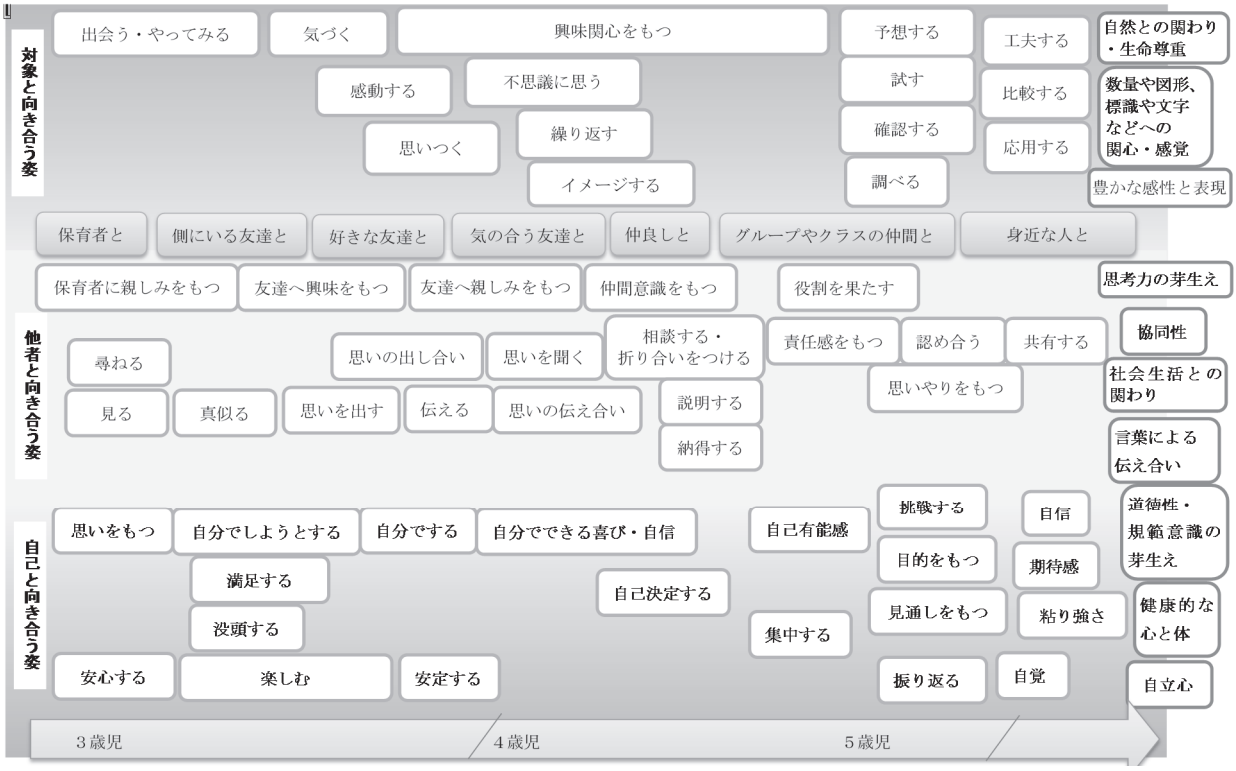


図３　対象・他者・自己と向き合う姿の育ち

２－３　「３つの向き合う姿」と「10 の姿」から本園現行カリキュラムを捉え直す

平成 30 年度より施行された新幼稚園教育要領では、５領域の内容を踏まえ、資質・能力が育まれている幼児の幼稚園終了時の具体的な姿として、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示された。「健康な心と体」「自立心」「協同性」「道徳性・規範意識の芽生え」「社会生活との関わり」「思考力の芽生え」「自然との関わり・生命尊重」「数量・図形、文字等への関心・態度」「言葉による伝え合い」「豊かな感性と表現」のいわゆる「10 の姿」である。

これらの 10 の姿は、幼稚園で幼児期にふさわしい遊びや生活を積み重ねる中で育つ具体的な姿であり、特に５歳児後半に見られるようになる姿であるが、５歳児になって突然見られるようになる姿ではないため、３歳児、４歳児の時期から幼児が発達していく方向を意識して指導していく必要がある。

そこで、現行本園カリキュラムのねらいが 10 の姿を含んでいるものとなっているかを確認するために、ねらいをまず幼小中共通の視点である「対象と向き合う姿」「他者と向き合う姿」「自己と向き合う姿」に分類し、次にそれぞれのねらいがどの 10 の姿と主に関係しているかを【　】内に表した（例：表１）。

このように表記することで、①現行カリキュラムは「10 の姿」を網羅しているが、数量・図形、文字等への関心・態度」や「思考力の芽生え」については記述が少ないこと、②３つの視点でみると、初めは「対象と向き合う姿」が多いが、次第に「『他者と向き合う姿』や自己と向き合う姿」に関する記述が多くなること、③５歳までに「健康な心と体」→「自立心」→「道徳性」→「協同性」の流れが捉えられることが分かった。

表１　現行カリキュラムにおける「対象と向き合う姿」と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

	３歳　　４月～６月	３歳　　６月～11 月	３歳　　11 月～３月
対象と向き合う姿	○身近で目につく親しみやすい遊具などに触れて遊ぶ。【健】 ○幼稚園での生活の仕方を知る。【健】 ○保育者が見守る中で、手洗い・排泄・着脱の仕方が分かり安心してしようとする。【健】 ○危ないことに気づき、しないようにする。【健】 ○したい遊びを見つけたり、保育者や友達のする遊びに興味をもち真似をしたりする。【自立】 ○保育者と一緒に土・砂・水等の感触を楽しむ。【自然】 ○保育者と一緒に小動物を見たり、触れたり、草花を摘んだりして遊ぶ。【自然】 ○生活に必要な言葉を知る。【言】 ○簡単な絵本や紙芝居を繰り返し読んでもらいながら親しむ。【言】 ○知っている歌や楽しい曲に合わせて、体を動かしたりすることを喜ぶ。【表・健】	○保育者や友達と一緒に歌ったり、踊ったり、なりきったりして遊ぶ。【表・健】 ○固定遊具や乗り物で遊んだり、跳んだり転がったりなどして体を動かす心地よさを感じる。【健】 ○自然の中でのびのびと過ごし、思い思いの方法で、自然を感じたり、取り入れたりして遊ぶ。【自然】 ○良いことや悪いことがあることに気づき、考えようとする。【道】 ○絵本や筋のあるお話に興味をもち、喜んで見たり聞いたりする。【言】 ○生活の中で必要な言葉が分かり、使おうとする。【言】 ○いろいろな素材に触れて、作ったり描いたりする。【表】 ○いろいろな物を取り込んで遊び、自分なりのイメージで楽しむ。【表】	○災害時や緊急時と日常の生活との区別がつき、保育者と一緒に安全に気をつけて行動しようとする。【健】 ○日本古来の行事や遊び（節分・餅つき・こまなど）に触れる。【社】 ○季節の変化や、自然現象を感じて生活をしたり、遊びの中に取り入れたりする。【自然】 ○遊びに必要な物を選び、思い思いのやり方で楽しむ。【表】 ○お話の楽しい場面を友達と一緒に表現する楽しさを味わう。【表】
他者と向き合う姿	○保育者と一緒に遊び、要求に応じてもらうことにより、信頼感をもつ。【健】 ○優しくしてくれる（料理・散歩等）年長児が周囲にいることを知り、親しみを感じる。【社】 ○保育者や友達の名前を覚えたり挨拶したりすることを喜び、親しみを感じる。【言】	○友達のいる側で安定して遊び、親しみをもつ。【健】 ○保育者や友達のしていることに関心をもち一緒にやってみようとする。【健】 ○保育者や友達と一緒に過ごすことを喜ぶ。【健】 ○遊びの中で待ったり譲ったりする気持ちをもつ。【自立】 ○自分の思いや欲求を保育者に伝えようとする。【言】 ○保育者を媒介にして、自分の思いを言ったり、友達の思いを聞いたりしながら、それぞれの思いがあることを知る。【言】	○保育者や友達と共に過ごすことの喜びを味わう。【健】 ○気の合う友達に思いを伝えながら楽しく遊ぼうとする。【言】 ○いろいろな友達にかかわって遊ぶことを楽しむ。【協】 ○いろいろなお世話をしてくれた年長児に感謝の気持ちをもつ。【道】
自己と向き合う姿	○保育者や友達との生活を知り、その生活に慣れる。【健】	○幼稚園の生活に慣れ安心して過ごす。【健】 ○物の始末、手洗い、着脱、排泄など自分でできることは自分でしようとする。【健】 ○危ないことに気づき、気をつけて遊ぼうとする。【健】	○心や体が大きくなったことや、自分でできるようになったことを喜ぶ。【健】 ○自分の思いをもって遊びに取り組み楽しむ。【健・自立】

２－４　幼稚園教育と小学校以上の教科とのつながりを考える

幼小のつながりの重要性については、今回改訂された幼稚園教育要領や小学校学習指導要領においても、繰り返し触れていることである。幼稚園においては、「小学校以降の教育や生涯にわたる学習とのつながりを見通しながら、幼児の自発的な活動としての遊びを通しての総合的な指導を行うことが大切」（幼稚園要領解説，2018）であり、「幼稚園教育が、小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながることに配慮し、幼児期にふさわしい生活を通して、創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培うようにする」（同幼稚園教育要領）ことが大切である。また、小学校学習指導要領では、１年生から始まるすべての教科において、「低学年においては、（中略）、「幼稚園教育要領等に示す幼児期の終わりまでに育ってほしい姿との関連を考慮すること。」と記されている。

これらのことから考えると、幼児期の教育が生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであることを踏まえ、「遊びを通しての総合的な指導」や「幼児期にふさわしい教育」の内容について、幼稚園側が小中学校に分かりやすく伝えることで、発達や学びの連続性が読み取れると思われる。そのための方法として、２－１で述べた「対象と向き合う姿」「自己と向き合う姿」を「他者と向き合う姿」の３つの共通の視点が考えられるが、さらに小学校以降の「教科」という枠の中で、あえて教科につながる幼稚園教育の内容を考えることで、より小中学校とのつながりが見えやすくなり、「幼稚園教育が基礎であり、始まりであること」も分かりやすくなるのではと考えた。そこで、幼稚園カリキュラムの中から小学校以降の教科につながる内容を見出し、幼小中一貫カリキュラムの中に位置づけることにした。

たとえば「国語」では、内容が「Ａ　話すこと・聞くこと」「Ｂ　書くこと」「Ｃ読むこと」の３つから成るため、①現行教育要領や指導計画、日々の子どもの姿などから特に国語に関係すると考えられる内容を抽出し、まずはＡ，Ｂ、Ｃに当てはめて考え、次に、②それらを幼稚園教育で大切にしたい具体的な幼児の姿としてまとめ、最後に③国語につながる幼稚園教育の内容としてまとめた（表２）。

このことによって、①幼稚園教育が学びの基礎であるということの具体の姿を示すことができ、②幼児期のどのような姿が小学校以降の各教科につながっているのかを示すことができた。また、③幼稚園生活の中

では、たとえば国語でいうと、読むことや書くことよりも前にまずは言葉に出会うこと、文字などの環境に出会うということがあるように、出会ったり触れたりすることが重要であるということに気づかされた。

さらに、これらの「国語」につながる幼稚園教育の内容は、「幼児期に育てたい10の姿」で考えると、主に「数量・図形、文字等への関心・感覚」「言葉による伝え合い」「豊かな感性と表現」と関係しているものであることも捉えられた。

表２　「国語」につながる幼稚園の教育内容

【「国語」の内容に関連する幼稚園教育の具体的な内容（指導計画から抽出）】

〇A話すこと・聞くこと

・簡単な絵本や紙芝居を見る。(3歳児４月～５月)
・「貸して」「入れて」など思いを伝えるための言葉があることに気付く。(3歳児５月～６月)
・カルタやすごろく、言葉あそびを楽しみながら、言葉の楽しさに触れたり興味をもったりする。(3歳児１月～２月)
・保育者にうれしいこと、してほしいこと、教えてほしいことなどを話す。(3歳児１月～２月)
・友達の言動に興味や関心をもち、話しかけたり一緒に遊ぼうとしたりする。（４歳児６月～７月）
・自分の気持ちや思いは言葉で話さないと相手には伝わらないことに気付き、話そうとする。（４歳児６月～７月）
・経験したことや感じたことなど、保育者や友達に話したり、友達の話に耳を傾けたりする。（４歳児９月～10月）
・仲良しの友達と遊ぶ中で、自分の思いを言ったり、友達の言うことを聞いたりする。（４歳児９月～10月）
・遊びの中で、仲間入りしたり理由を聞いたり、謝ったりなどの言葉を使う。（４歳児10月～11月）
・自分の考えを言ったり友達の思いを聞いたりして、遊び方やルール、役割などを考えて遊ぶ。（５歳児10月～11月）

〇B読むこと

・文字に関心をもち、自分で絵本を読もうとする。
・気になったことを図鑑で調べたり、折り紙の折り方の本を見てつくったりする。

〇C書くこと

・文字に興味をもち、遊びの中で使ってみようとする。
・生活の中で言葉の楽しさや美しさに気付いたり、イメージや言葉を豊かにしたりする。

⇩

【幼稚園教育で大切にしたい具体的な幼児の姿】

・簡単な絵本や紙芝居を見る。
・「貸して」「入れて」など思いを伝えるための言葉があることに気付く。
・カルタやすごろく、言葉あそびを楽しみながら、言葉の楽しさに触れたり興味をもったりする。
・保育者にうれしいこと、してほしいこと、教えてほしいことなどを話す。
・友達の言動に興味や関心をもち、話しかけたり一緒に遊ぼうとしたりする。
・自分の気持ちや思いは言葉で話さないと相手には伝わらないことに気付き、話そうとする。
・経験したことや感じたことなど、保育者や友達に話したり、友達の話に耳を傾けたりする。
・仲良しの友達と遊ぶ中で、自分の思いを言ったり、友達の言うことを聞いたりする。
・遊びの中で、仲間入りしたり理由を聞いたり、謝ったりなどの言葉を使う。
・自分の考えを言ったり友達の思いを聞いたりして、遊び方やルール、役割などを考えて遊ぶ。

⇩

【「国語」につながる幼稚園教育の内容】

〇日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ。
〇生活の中で言葉の楽しさや美しさに気づく。
〇いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする。
〇生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心をもつ。
〇自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気づく。
〇高齢者をはじめ、地域の人々などの自分の生活に関係の深いいろいろな人に親しみをもつ。
〇友達と積極的に関わりながら喜びや悲しみを共感し合う。
〇いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする。
〇様々な出来事の中で感動したことを伝え合う楽しさを味わう。
〇自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう

このようにして、小学校以降のすべての教科について、その教科につながる幼稚園教育の内容を捉え、教科ごとに幼小中一貫カリキュラムを作成した。また、作成したカリキュラムの幼稚園の部分については、①幼稚園教育の特性を踏まえて的確に表現しているか、②小学校以降の教育とのつながりが見えるように表現しているかという観点からもう一度検討をした。例えば「音楽」の一貫カリキュラムは図４のとおりである。

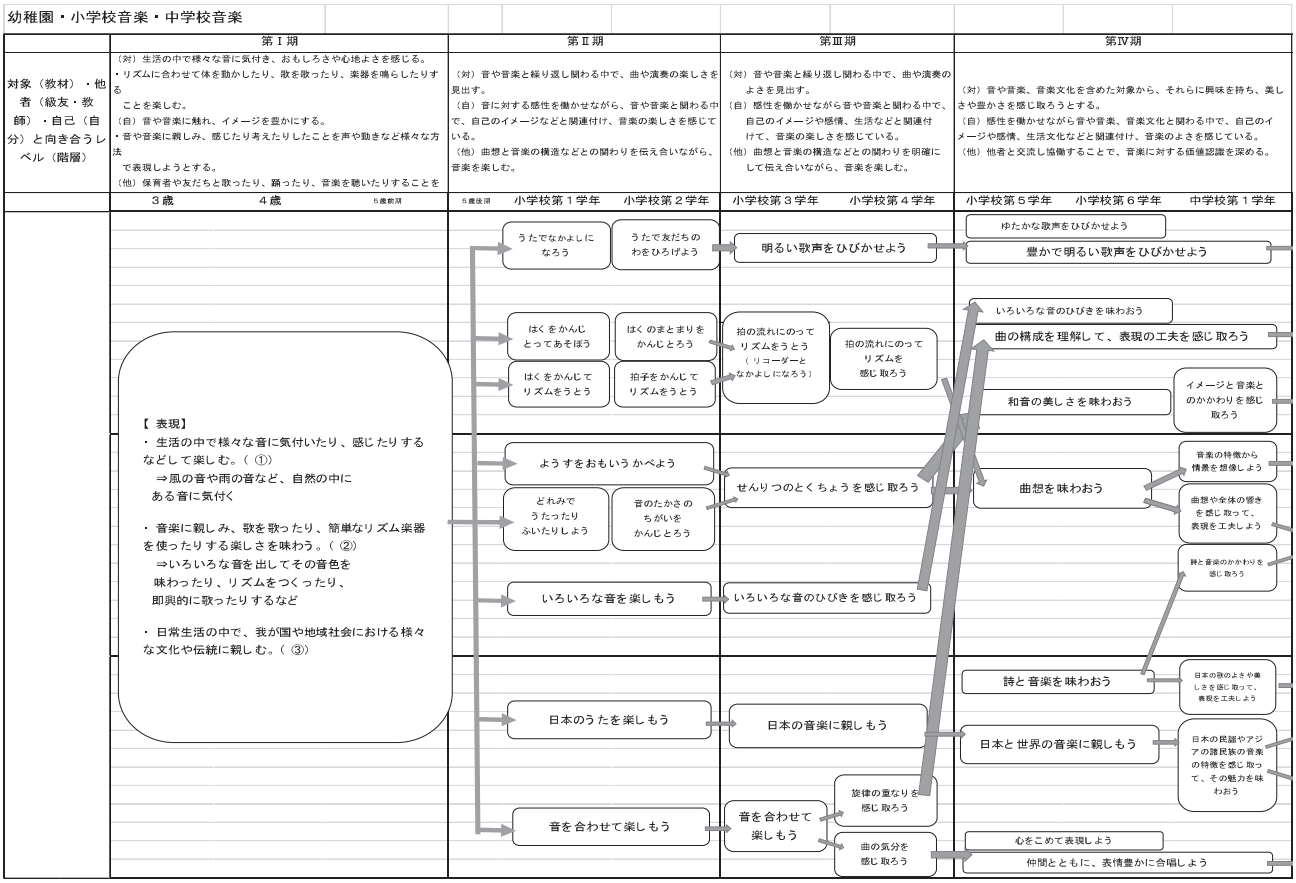


図４　例　教科「音楽」で考える一貫カリキュラム

２－５　幼稚園カリキュラムの再編成

上述２－１から２－４の過程と内容を踏まえて、改めて幼稚園カリキュラムに立ち返り、幼稚園教育課程の「期」の見直しと「ねらい」の見直しをおこなった。

「期」については、３歳児、４歳児については、これまでの教育課程同様３期が望ましいと考えたが、５歳児ついては、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が主に５歳児後半に現れる姿であることや、幼小中一貫カリキュラムにおける発達段階の捉えを５歳児後半から２年生までと考えたことから、これまでの３期から２期に変更して考えることにした。

「ねらい」については、現行の教育課程をベースとしながら、「対象と向き合う姿」「自己と向き合う姿」「他者と向き合う姿」の育ちが見えるような表現とした。また、具体的な姿を表している表記については、内容の中で表すことにし、シンプルなねらいとなるようにした。

たとえば３歳児教育課程のねらいでは、「園生活に慣れる」ことに関しては、主にⅠ期でねらえばよいのではないか、Ⅱ期の「園生活に慣れ」やⅢ期の「園生活のリズムがわかり」などの表記（表３下線部分）については、特に表さなくてもよいのではないかと話し合い、削除することにした。またⅡ期の「真似したり一緒に遊んだり」やⅢ期の「友達を入れたり誘ったりして」（同表波線部分）などの具体的な例示の姿については内容に入れることにし、包括的な姿としてまとめて、「一緒に遊ぼうとする」や「先生や友達とかかわりながら」（同表２重線部分）という表し、幅をもたせるようにした（表３）。同様に、４、５歳児の教育課程のねらいについても、このようにして見直していった（表４，５）。ねらいに引き続いて、内容についても、同様の手順を踏みながら今後見直していく予定である。

表３　３歳児教育課程　ねらいの見直し

期	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
月	4　5　6	7　8　9　10　11	12　1　2　3
修正前	せんせい　きたよ	あれしたい これしたい・なにしてるの	いっしょでたのしいね
	◎先生や多くの友達のいる生活の中で安心して過ごす。 ◎身近にいる先生や気の合う友達に親しみをもつ。	◎園生活に慣れ、いろいろなものに触れて遊びながら、自分なりの遊びを十分楽しむ。 ◎先生や友達のしていることに関心をもち、真似したり一緒に遊んだりして、一緒に過ごす楽しさを味わう。	◎園生活のリズムがわかり、自分なりの思いをもって過ごしたり、自分でできる喜びをもったりする。 ◎友達を入れたり誘ったりして、友達と一緒にいろいろな遊びを楽しむ
修正後	○園生活に慣れ、安心して過ごす。 ○身近にいる先生に親しみをもつ。 ○側にいる友達に関心を向ける。	○好きな遊びを楽しむ中で、いろいろなものにかかわろうとする。 ○先生や友達のしていることに興味・関心をもち、一緒に遊ぼうとする。	○自分なりの思いをもって、好きな遊びを楽しむ ○先生や友達とかかわりながら、一緒に過ごすことを喜ぶ。

表４　４歳児教育課程　ねらいの見直し

期	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
月	4　5　6	7　8　9　10　11	12　1　2　3
修正前	ようちえん　たのしいな	おもしろそうだな　やってみよう	ともだちっていいな
	◎幼稚園での生活に慣れ、安定して生活する。 ◎友達やいろいろな遊びに興味を持ち、やってみようとする。	◎したいことを自分でみつけて遊び、十分に楽しむ。 ◎友達に親しみ、一緒に遊ぼうとする。	◎友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わう。 ◎自分のしたいことに存分に取り組み、満足感を味わう。
修正後	○いろいろなものに興味をもち、自分からかかわろうとする。 ○先生や友達がしていることに興味・関心をもつ。	○自分のしたいことを見つけて、十分に楽しむ。 ○友達と一緒に遊び、親しみをもつ。	○自分のしたいことに存分に取り組み、満足感を味わう。 ○友達に親しみをもってかかわり、一緒に遊ぶ楽しさを味わう。

表５　５歳児教育課程　ねらいの見直し

期	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
月	4　5　6	7　8　9　10　11	12　1　2　3
修正前	いっしょにあそぼう・やってみよう	ああしよう こうしよう・がんばろう	みんなでしよう・もうすぐ１ねんせい
	◎興味や関心のあることを十分に楽しむ。 ◎友達と一緒に生活する楽しさを味わう。	◎自分なりの目標をもって、遊びや生活に取り組む。 ◎友達と一緒に遊びや生活を進める楽しさを味わう。	◎友達との信頼関係を深め、互いに認め合いながら集団の中で自信をもって生活する。 ◎友達と一緒に共通の目的に向かって遊びを進め、充実感を味わう。

修正後	Ⅰ　いっしょにやってみよう	Ⅱ　ああしようこうしよう・みんなでがんばろう
	○自分から進んで遊びや生活に取り組む。 ○いろいろな友達とかかわりながら、一緒に遊びや生活を進める楽しさを味わう。	○自分なりの目標をもって遊びや生活に取り組み、達成感を味わったり、自信をもったりする。 ○友達と共通の目的に向かって遊びや生活を進め、充実感を味わう。

２－６　まとめ（成果と課題）

本研究の目的は、幼小中一貫教育実現のために共通の視点として見出した「対象と向き合う姿」「自己と向き合う姿」「他者と向き合う姿」と、幼小接続の視点として新幼稚園園教育要領で示された「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」とを踏まえて、本園の現行カリキュラムを見直し、幼小中 12 年間の子どもの育ちが繋がる幼稚園カリキュラムとして再編することであった。

この目的を達成するために、事例検討やそれぞれの視点からの見直し、育ちの課程を捉える、などを行ってきたが、これらにより次のような成果を得ることができた。

①３歳から５歳までの各年齢の事例について、対象、自己、他者と向き合う姿に視点をあてて事例を考察・検討することで、３歳から５歳までのそれぞれの具体的な向き合う姿やその育ちの過程を捉えることができた。また、３つの向き合う姿は相互に絡み合っているという関連性を捉えることができた

②幼児の対象、自己、他者と向き合う姿について、育ちの過程を図として表すことで、３歳から５歳までの見通しをもつことができた。さらに、この３つの視点が小中学校と同じ視点であることにより 12 年間の育ちについて考える手掛かりとなった。

③現行の幼稚園カリキュラムについて、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の観点から捉え直すことで、小学校とのつながりを再確認できたとともに、カリキュラムの中に積極的に入れ込むべき１０の姿について確認できた。

④幼小中 12 年間の育ちをつなげるために、「３つの姿」を幼小中共通の視点としてもちながらカリキュラムを編成していくことの重要性と必要性が確認できた。

⑤幼稚園教育の中から小学校以上の教科につながる内容を意識的に見出していくことで、幼稚園教育と小学校以上の教育のつながりが捉えられたとともに、12 年間の流れが確認できた。また、意図的に各教科とのつながりを考えていくことで、改めて幼児教育の総合性や未分化性を再確認できたとともに、幼児教育における遊びや生活の重要性を再確認できた。

⑥小学校や中学校へ幼稚園教育やその内容を的確に伝えようとすることで、ふさわしい言葉や表現の仕方、伝え方などについてより自覚的に考えるようになった。

課題としては、カリキュラム見直しの根拠となる事例検討において取り上げた事例が、その年齢を代表する事例としてふさわしいものであったかということと、検討した事例数があまり多くなかったということがある。カリキュラムの編成は、子どもの実態を的確に捉えることから始まる。今後は、より的確に子どもの姿を捉えるための事例を抽出し、その検討を繰り返していきたい。

また、カリキュラムの表し方として、小中学校へのつながりが見えやすいための表し方と幼稚園の生活内容が見えやすいための表し方とが考えられ、その両方が必要であると認識できたとともに、両方を兼ね備えた形で表せないかとも考え、模索しているところでもある。

おわりに

本研究の意義は、幼稚園の育ちをどのように小中へとつなげていくのか、一人の人間を幼小中の 12 年でどう育てていくのかということについて「カリキュラム」という観点から考え、幼小中共通の視点を踏まえたカリキュラム編成に取り組んだことにある。カリキュラムは大枠ができたところであり、内容や表し方にはまだまだ工夫の余地があるが、「対象と向き合う姿」「自己と向き合う姿」「他者と向き合う姿」の大まかな育ちの課程を捉えることはできたので、今後も 12 年間のつながりが見えるとともに、幼稚園教育の内容が充実するカリキュラムの探求に努めていきたい。また、見直したねらいをもとに内容を吟味し、指導計画の充実へとつながるようにしていきたい。

幼小中のカリキュラムがつながるということは、子どもの育ちがつながるということでもあり、それを支える援助もつながるということである。今後は、子どもの育ちを支える環境や援助についても探りながら、幼小中で援助や手立てもつながっていくように、一緒に研究に取り組んでいきたいと思う。

引用・参考文献

文部科学省：「幼稚園教育要領解説」，フレーベル館，2018.

文部科学省：小学校学習指導要領，東洋館出版社，2018.
文部科学省：小学校学習指導要領解説　総則編，生活編，国語編，算数編他，東洋館出版社，2018.
文部科学省：指導計画の作成と保育の展開」，フレーベル館，2013.
文部科学省：指導と評価に生かす記録」，チャイルド本社，2013.
無藤隆：「幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿」，東洋館出版社，2018.
無藤隆：「10 の姿プラス５・実践解説書：幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿をカラー写真いっぱいの実践事例で見える化！!」，ひかりのくに，2018.
秋田喜代美：「発達が見える！５歳児の指導計画と保育資料第２版 Gakken 保育 Books」，学研プラス，2018.
山口大学教育学部附属幼稚園：研究紀要 36「友達とかかわる力を育む～「一緒にを楽しむ」なかで～」，2016.
山口大学教育学部附属幼稚園:研究紀要 37「友達とかかわる力を育む～環境と援助に視点をあてて～」, 2017.
村上清文他，「友達とかかわる力を育む環境と援助の研究」，山口大学教育学部学部教育実践総合センター研究紀要 46，2017.
横山洋子：「５歳児の指導計画」，ナツメ社，2018.
中室牧子：「『学力』の経済学」，ディスカヴァー・トゥエンティワン ，2015.
無藤隆・古賀松香：「社会情動的スキルを育む　保育内容人間関係」，北大路書房，2016.
国立大学法人お茶の水女子大学：「幼児期の非認知的な能力の発達を捉える研究―感性・表現の観点から―」2016.